学内広報

2023.5.25 no.1570

5月14日、アメフト双青戦（対京大戦）の応援に駆けつけたイチ公と応援部員（アミノバイタルフィールド）

全ての学生の国際化を支援する「コンシェルジュ」

グローバル教育センター発足

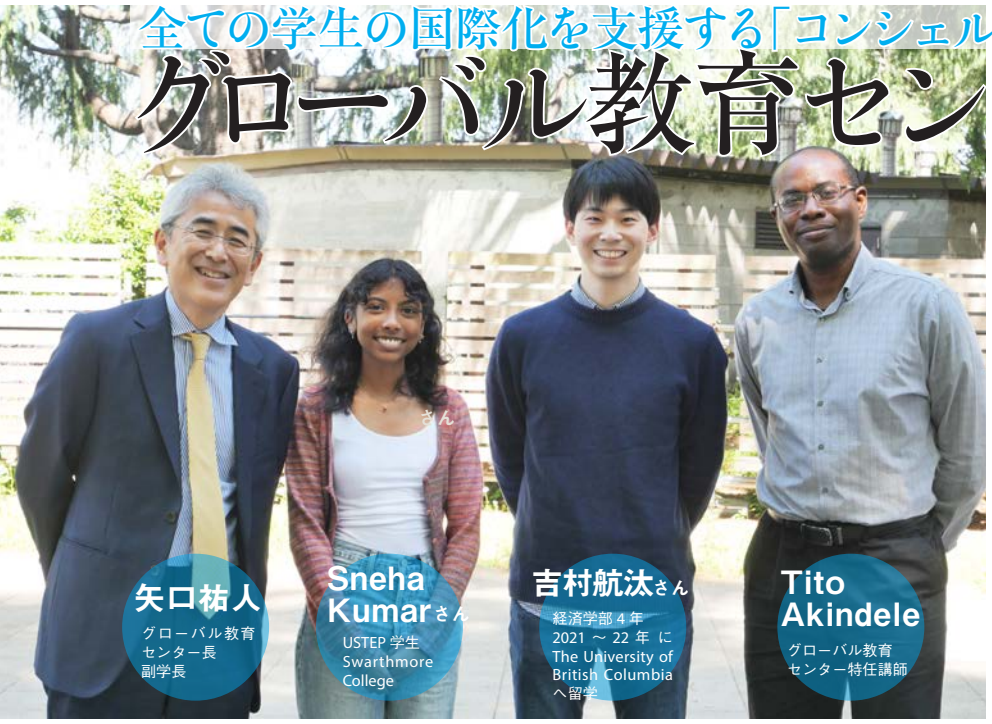
旧帝大の七校が43競技で争う総合体育大会

七大戦で優勝しよう!

東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO

全ての学生の国際化を支援する「コンシェルジュ」

グローバル教育センター発足



2023年4月1日に発足したグローバル教育センター（Center for Global Education/GlobE）。学生の国際化をサポートするための学内共同教育研究施設として創設されました。約30名の教員と200名以上の全学交換留学生（USTEP生）が所属しているこのセンター。全ての学部後期課程と大学院の学生が受講できる、SDGsに関することを英語で学ぶ「グローバル教養科目」を提供するのが大きな特徴です。センター長、授業を担当する教員、そして二人の学生に、GlobEの概要、留学や多様な学生との交流などについて語ってもらいました。

学生のためのコンシェルジュ

矢口　GlobEは、全ての学生の国際性を高めることができるようなプラットフォームを作りたいとの思いから発足しました。国際化に関連する様々な機能を担っていますが、その柱の一つが「グローバル教育コンシェルジュ」です。宿泊客のさまざまな要望に応えるホテルコンシェルジュのように、グローバル教育に関してのコンシェルジュとして全学生の国際化をサポートしていきたいと思っています。たとえば「留学に関心があるけど、どうすればいいか分からない」といった学生の問いに答え、支援をしていきます。この「コンシェルジュ」機能の基盤となるのが、国際総合力認定制度「Go Global Gateway」です。吉村さんはこの制度に登録し、カナダのブリティッシュコロンビア大学（UBC）に留学されましたが、どうでしたか？

吉村　最高でした。UBCはダイバーシティに富んでいて、全学生の30%くらいが留学生だと聞きました。留学中は5人の学生とルームシェアしていましたが、出身国がカナダ、インド、中国、シンガポールそしてトルコと多様で、世界を縮小したような環境でした。

矢口　授業はどうでしたか？

吉村　大変でした。全部で6科目を履修しましたが、日本での授業と違ってディスカッションがとても多く、教授や他の学生からの質問に対する答えを準備しなければなりませんでした。質問も複雑で難解なものが多くて。でも皆とても親切で思いやりがありました。ディスカッションのテーマだけでなく、他の学生のことなど、とても多くのことを学べました。

矢口　そもそもなぜ留学しようと思ったのですか？

吉村　僕は2歳から5歳までの3年間、ドイツに住んでいたんですが、幼かったので記憶がないんです。故郷の岐阜に帰国してから友達に「英語やドイツ語しゃべってみて」と言われましたが、話すことができず、なんというか、それが残念だったんです。その経験から留学してみたいという漠然とした思いを持っていました。その後、大学一年生のときに、留学経験がある兄から、「留学するといろんな経験ができるし、日本にいては学べないことが学べる」と強く勧められ、決心しました。

交換留学生がGlobEに所属

矢口　SnehaさんはUSTEP※生としてGlobEに所属していますね。東大に留学しようと思った理由は何でしたか？

グローバル教育センターのロゴマークをデザインしたのは、国際教育推進課の貴舩美波さんです。公募で集まった約20のデザイン案から選ばれました。GlobEの命名と「E」を大文字にするアイデアは、同課の古川稔子さんの閃きです。

Sneha　私が学ぶ米国のスワースモア大学では、約40%の学生がどこかの時点で留学します。私は歴史を専攻していますが、特にアジアの歴史に注目しているので、アジア地域に行きたかったというのがあります。もともとヒューストンという多様性に富む都市で育ち、インターナショナルスクールに通っていました。なので、アメリカ人以外の友達が多かったんです。そのような環境と比べると、大学は少し多様性に欠けていたので、海外でいろんな経験をして、新しい人達と出会いたかったんです。

矢口　東大での留学生活はどうですか？

Sneha　素晴らしいです。東大のキャンパスで他の学生と知り合いになって、ランチに行ったり都内のさまざまなところに出かけたりしています。FGAという

※University-wide Student Exchange Program

4月3日、藤井輝夫 総長と林香里 理事・副学長出席のもと、発足式を行いました(@理学部1号館東棟)。グローバルキャンパス推進本部から改組されて発足したGlobEには「国際支援」「国際交流」「国際教育」「日本語教育」の4部門があり、従来の国際交流課と国際支援課を再編成した国際教育推進課が事務を担当しています。

インカレ軽音サークルにも入って、この前の週末は山中湖に行き、旅館に泊まってきました。日本人の学生とも知り合うことができてとても良い経験でした。

「グローバル教養科目」とは?

矢口　GlobEのもう一つの柱が、英語で行われる「グローバル教養科目」です。後期課程と大学院学生を対象に4月に開講しました。1クラス20人までの小規模で、ディスカッションやプレゼンテーションなどアクティブラーニングに重点を置いています。工学や経済学、人文科学など、さまざまなバックグラウンドを持つ学生が受講する場にしたいと思っています。今セメスターに開講しているのは全部で7科目。Tito先生も担当されていますが、授業はどうでしょう？

Tito　順調に進んでいます。私が担当している授業名は“Chemistry for a Sustainable World”ですが、11人いる学生のうち、化学専門の学生は3人。他の学生の専門は、機械工学、生物材料科学、生物学、データ・材料科学などさまざまです。それらの異なる専門分野と、私が教える内容がどう関連するのか。そのような点と点を繋げる手助けをしたいと考えています。 もしかすると、化学専門の学生は「化学だけについての授業じゃないな」と思うかもしれない。でも他の学問の知識なしには、あなたが学んでいる化学は全くの時間の無駄なのだ、ということを理解してもらいたいです。

矢口　11人の学生は留学生ですか？

Tito　9人が交換留学生で、2人は日本の学生です。国内の学生も履修してくれたことをとても嬉しく思っています。グループに分けてディスカッションをしてもらう際には、この2人の学生は別々のグループに入れています。ここでの経験が、たとえば将来海外に行く時などの自信につながるのではないかと思います。

国際化に必要なもの

矢口　まさにそのような、東大の学生が交換留学生とともに授業を受けるような環境を増やしたいんです。特に後期課程に入ると、それぞれの学部の授業のみになってしまいがちなので、異なったバックグラウンドをもつ学生が集うような場所を作っていきたいと考えています。

矢口　GlobEで大切にしていることの一つが、学生や教員の声に耳を傾けることです。そこでお聞きしたいのですが、東大は学生のグローバル化を支援するために何をすべきだと思いますか？

吉村　留学に今一歩踏み出せないような学生の背中を押してほしいです。本部国際教育推進課で学生アシスタントとして働いているんですが、そこで感じたのは多くの学生が留学しようかどうか迷っているということです。英語に自信がなかったり、奨学金を得るのが難しかったりと、その理由はさまざまです。そういった心理的な壁を取り払うようなイベントや、留学に関心がない層にもアプローチできるイベントがあればいいなと思います。

Sneha　多くの交換留学生が日本人学生ともっと話したいと思っています。繋がりを持ちたいというんでしょうか。私はサークルに入ったので、日本人学生の中に入ることができてある意味ラッキーでした。だけど日本語が流暢ではない学生にとっては、それは結構難しいんです。約3万人の日本人学生がいる中でUSTEPの学生はたったの200人しかいないということを考えると、その垣根を越えて日本人の学生に話しかけて知り合いになるというのは結構ハードルが高いです。夕食に一緒に行くなどといった、私たちが交流できるようなイベントを大学が作ってくれるといいなと思います。

矢口　素晴らしいアドバイスですね。今もさまざまなイベントを開催していますが、その数を増やすことはできるかもしれません。5月末には大規模な対面での留学フェアを駒場で開催します。今後も留学生と日本人の学生が知り合うことができる場を作っていきたいと思います。

（4月27日、グローバル教育センターにて）

グローバル教養科目

教員	科目名
Tito Akindele	Chemistry for a Sustainable World
Tomoko Kamishima	Allocating resources in health care fairly
Anna Bordilovskaya	Diversity in Japanese Culture and Language
James Ellinger	DIY and Open Science
Manuel Senna	Underground and Clandestine Media
Raquel Moreno-Peñaranda	The "SDGs" Contested
Tom Gally	The Problems of English in Today's World

本年度Sセメスターに開講される「グローバル教養科目」。SDGsに関連する授業を7名の教員が担当しています。1クラス原則20人までと少人数制で、インタラクティブなディスカッションを中心に行われます。成績評価は優上〜不可の5段階評価か、合格/不合格のみの評価かを、学生が選択します。Aセメスターからはもっと多くの科目が開講される予定です。

旧帝大の七校が全43競技で争う総合体育大会

七大戦（ななだいせん）で優勝しよう!!

部員数はスタッフを含め65人で、運動会の女子部では最大規模です。運動部出身は約半数でラクロス経験者はゼロ。私は兄の友人がラクロス部女子で楽しそうだったので入部しました。去年のリーグ戦では、13年ぶりに進出した1部との入れ替え戦で成蹊大に惜敗しました。終了まで8分の時点で追いつきながら4連続失点で9-13。悔しさが募る一方で、1部は遠くないとも感じました。3年生で唯一のスタメンだった私がやらないといけないと思い、今年度主将を務めています。スローガン「勝利の開拓者」には、今度こそ初昇格をという念を込めました。

リーグ戦の重要な前哨戦となるのが七大戦です。過去9回優勝しており、直近では2019年に勝ちましたが、前回は京大に敗れ、3位でした。優勝した名大と関西リーグで1部に昇格した京大は、今年も強敵になりますが、主管校として全勝優勝を狙います。

私たちが得意なのは、ボールを奪って相手の守備が整う前に攻める「ブレイク」。DFが球を奪って持ち上がる形を磨いています。もう一つは走り勝つこと。ラクロスは交代が自由ですが、東大は強豪に比べ人数が少ない。各人が最後まで走り切るため、ラン練習に励んでいます。

注目株は3年の中村キアラ選手です。長身のゴーリーで、関東ユースに選抜されています。私は去年のリーグ戦では13得点でしたが、今年はもっと取って昨年得点王になった先輩に続きたいです。ラクロスは得点数が多く、ルールを知らなくても楽しめます。七大戦の会場は御殿下。勝って「ただ一つ」をともに歌いましょう。

”御殿下で全勝優勝を果たして「ただ一つ」を歌います！“

Lacrosse

女子ラクロス部
佐藤三千瑠さん（経済学部・4年）

バド部は男女が一体となって活動しています。部員は全部で35人ほど。関東学生リーグは6部まであり、東大は男女とも4部で3部昇格を目指しています。リーグ戦は春季と秋季の二つ。24校が6ブロックに分かれ、各ブロックの1位同士で戦って上位2校に入れば3部下位との入れ替え戦に進めます。東大は十分ブロック優勝を狙える位置につけています。

七大戦では、1週間かけて7大学が総当たりで戦います。シングルス6本＋ダブルス3本で、5戦取れば勝利です。前回は男子も女子も上位につけていましたが、途中でコロナ感染が広がって大会が中止になってしまいました。男女とも久しく優勝していませんが今年は主管校として優勝します。強敵の北大戦がポイントでしょう。

今年のバド部は感情を表に出す人が多いです。七大戦では試合に出ない人がコート至近から盛り上げてくれます。あと、理由は不明ですが、4年生が金髪にして大会に臨むのが伝統です。今年は4年生が18人。金髪が揃うのは見どころかもしれません。私もそろそろ金髪にします。

プレーでは、相手に大きく上げさせたシャトルをスマッシュして決めることを大事にしています。細かい技巧に頼らず、手打ちにならずにしっかり足を運んで打つということが昔から奨励されてきました。相手を動かして細かく打ち分けるのをよしとする大学もありますが、うちではシンプルに力強く打って決めるのが正義です。会場の文京区スポーツセンターで、私の金髪姿とともに確認してみてほしいです。

”伝統の金髪揃えで力強く打ち込む姿を見てほしい！“

Badminton

バドミントン部
古橋郁一さん（工学部・4年）

公式グッズが続々登場！

※価格は税込

タオルマフラー 1,100円

トートバッグ 1,300円

A5リングノート 400円

第62回七大戦の公式グッズには、主管校の東大で実施したコンペで選ばれたデザインが使われました。東大運動会のマスコット・イチ公があしらわれており（マフラー以外）、東大生協ほか参加大学の生協でも買えます。クリアファイルはキャンパス各所で配布中なので探してみて！

クリアファイル 配布品

旧帝国大学の七大学が43の運動競技で競い合う全国七大学総合体育大会（七大戦）。第62回大会は、本学が主管校となってすでに始まっています。12回目の総合優勝を狙っている本学運動会。中でも注目の3部の主将に意気込みを聞き、運営を担う総務部の実行委員には見どころを聞きました。他大に負けるなど研究でも運動でも許せないですよね…? 応援しましょう。勝ちましょう。

私は高校で水球部にいて、大学でもマイナー競技のほうが活躍できると思って入部しました。水球陣のホームは第二食堂地下プール（水深2.5m）です。関東学生リーグ2部に属し、一昨年、去年と4位。もう少しで入れ替え戦に進める順位ですが、上位とは実力差が大きいのが現状です。1チーム7人ですが、現時点で選手は5人だけで、今年度は新しく入る1年生にかかっています。有望な選手が来れば3位も目指せますが、そうでない場合は4位が目標です。

七大戦では、一昨年、昨年と優勝しており、今回は三連覇がかかっています。ライバルは例年九大ですが、今年は東北大も強そうです。一日目にリーグ戦を行い、二日目にトーナメント戦を行うのが通例で、リーグ戦で上位になればシードされます。前回大会はリーグ戦が3位でシード外でしたが、トーナメントは全勝でした。決勝の相手は九大。5人の4年生とともに3年の自分も出場し、10対9という僅差での勝利をつかみ取りました。

水球では、前列中央にいる長身選手が相手DFを制しながらボールを落とし、それを周囲の選手が拾って打つのが得点パターンですが、東大はこのやり方を採りません。中に切り込んで打つのが得意な左45（2列目左）の笠間栄伸選手（3年）が得点源です。リーグ戦は5月中に終わり、4年生の引退試合となるのが七大戦。水球は8月26-27日ですが、会場は栃木なので応援に来てとは言えません。でもマネージャーがインスタグラムでライブ配信する予定なので、見てください。右45からミドルを突き刺すサウスポーがいたら、それが私です。

“七大戦三連覇で引退します 水着をつかむ奴は蹴ります”

水泳部水球陣
川﨑祐輔さん（工学部・4年）

本郷・駒場で応援するなら！ ～教職員向け七大戦試合情報

本郷の御殿下グラウンドではラクロスが行われます（男子・6/17-18、女子・6/23-25）。御殿下体育館では卓球（9/6-10）が、御殿下記念館では空手（7/9）とハンドボール（8/20）が、駒場体育館では少林寺拳法（7/1-2）とフィールドホッケー（8/21-26）が、文京スポーツセンターではバドミントン（8/10-15）が、駒場テニスコートでは軟式テニス（8/26-30）が、安田講堂では総合開会式（7/8）と応援団演舞会（8/20）が、山上会館では総合閉会式（9/20）が観られます。詳細はwww.7univ-nanadaisen.jpで！

竹内　冬競技では、アイスホッケー部と航空部が優勝し、スキー部は4位でした。現在、東大は勝ち点22で首位。阪大が14点で2位につけています。

梅津　7校参加の競技の場合、1位10点、2位8点、3位6点……というふうに勝ち点が入ります。

竹内　東大は主管校を務めた第55回で優勝しました。基本的に主管校が強く、主管校以外が優勝すると「主管破り」と特筆されます。56・57・58回と主管破りを果たしたのが東北大です。コロナで中止になった2大会を挟み、主管の61回も優勝。今回5連覇がかかりますが、絶対に阻止しないといけません。

松尾　前回、1位だった競技は東大が6種目で東北大が4種目。最下位は東大が5種目で東北大は1種目。これが明暗を分けました。優勝候補でなくても3～4位を取る競技が増えれば……。

梅津　前回は航空部、男子ラクロス、ハンドボールなど東大が強い競技が途中で中止になりました。これらが復活する今回、総得点は伸びると読んでいます。

竹下　運動部以外の学生も巻き込みたいと思い、今回は七大戦グッズのデザインを学生に募りました。審査で選ばれたデザインを使った商品を6月から販売します。ビラを学生デザインサークル（designing plus nine）に頼んだのもその一環でした。

松尾　3万枚を参加校の新入生に配布し、近隣の高校にも配っています。未来の東大生に七大戦を知ってもらい、入学したら運動部に、という意図です。

竹内　現在、運動会入会率は3分の2程度。運動部に入部する学生は1学年600人程度です。

竹下　私は2020年度入学ですが入学後にコロナでずっと大学に来られないなか、運動部のつながりは心の支えでした。

松尾　確かに。もしコロナがなかったら他にもやりたいことが増えて迷っていたかもしれませんね。大学から始めた競技で七大戦に出て活躍する人は結構います。皆が同じ条件でスタートできるのがいいところです。

竹内　予算規模は3000万円ほど。エントリー費を各大から集め、企業の協賛も集めて回しています。メイン協賛は学士会です。大塚製薬、アース製薬、白元アースからは、スポーツ飲料や感染症対策グッズや虫除けなどの物品を提供いただきました。今回は、田中貴金属から各競技のMVPにトロフィーをいただけることにもなりました。

松尾　今大会のスローガンは「**原点に返り、深化させる**」です。過去2大会が中止になり、前回も不完全な形だったので、まずは全競技の確実な実施を取り戻す。そして、一層応援される大会にする。プロとの連携と独自配信をあわせ開会式と5-6競技のウェブ配信を行う予定です。

梅津　4年生の引退試合となる競技もあり、各大学応援部の演舞もあります。応援部が行く競技を狙うのも楽しいかも。

竹下　広報局では各競技の結果をいちはやくTwitterで発信していきます。**@nanadaisen** のフォローをぜひお願いします。

教養教育の現場から

リベラル・アーツの風

第57回

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

学問の垣根を越えてSDGsの現在地を確認

／教養教育高度化機構シンポジウム2023「「変革」の現状と行方」

初年次教育部門准教授
岡田晃枝

――年に一度の機構シンポジウム。今回は部門横断型組織のSDGs教育推進プラットフォームが企画したんですね。

「私は初年次教育部門ですが、SDGsに関わる授業を続けている関係で、このプラットフォームにも参画しています。周知が進むSDGsですが、果たして各々の課題は今どのような状況にあるのかを確認しようと考え、そこに駒場らしさを重ねて検討して出てきたのが、現実を見極める目を養うための教育ということでした。様々な分野の専門家がいて、多岐にわたるSDGsのほとんどの項目をカバーできるのが駒場だと認識しています」

理想のためにまず現実を捉える

「SDGsの前身であるMDGsのときは、全体では目標に近づいたように見えますが、一方で貧しい国々の状況はあまり変わりませんでした。その反省を経てできたのがSDGsであり「誰一人取り残さない」の理念です。たとえば太陽光発電を推進するだけでは不十分で、世界を俯瞰して見ないといけません。「風が吹いたら桶屋が儲かる」の全体を自らの目で確かめる学生を増やしたい。そのためにまず現実の姿を捉えることが必要だということで企画したのがこのシンポジウムです」

――パネルでは「場違いな感じ」と複数の先生が話していたのが印象的でした。

「SDGsの目標17が掲げるマルチステークホルダー・パートナーシップを学問分野の垣根を越えた協力も含むものと捉えてのテーマ設定でした。今回お声がけしたのは、普段からSDGsを看板に掲げている先生方ではなく、実はSDGsに関係していると聞けばなるほどと思える研究をしている皆さんです。SDGsの企画では技術の話に偏りがちですが、よい技術があっても社会に適用できるかはわからず、実際には史学や文学や社会や制度も大きく関わってきます。今回の人選は、多分野の研究者が関わり合うのがSDGsだというメッセージでもありました」

「ディスカッションでは、各々の研究をSDGsの現状に絡めてお話しいただき、分野の垣根を越えた取組みや、社会問題を解決に導く複合的視座を持つ人材をどう育てるべきかも議論したかったのですが、時間が足りませんでした。全体でコンテンツが多すぎたかもしれません。一つ一つの料理はすごく手が込んでおいしいのにじっくり味わえず一気にお腹に流し込む感じになったのは反省点です」

異分野の研究者を繋ぐ場にも

「今回、SDGsをキーワードに異分野の研究者を結び付ける場にもなるといいなと思っていました。初顔合わせの人が多かったんですが、パネル終了後、これを機会に何かやろうと話す先生方を見ることができました。今回登壇した先生たちとプラットフォームとの間でも今後いっしょに何かできないかなと思います」

――今後の活動予定などありますか？

「昨年3月にプラットフォーム主催で「SDGsビジネスアイデア学生発表会：社会を変えるために東大生ができること」をオンラインで実施しました。SDGsの実現に関わりたい学生に発表の機会を与え、実務家や研究者や市民からフィードバックをもらおうというものです。たとえば前回は、医学部の学生が血液透析の待ち時間を使ってまつげやネイルのケアができるようにしてはどうかというアイデアを発表したところ、当事者が見て率直な意見をくれました。この発表会の2回目を実施して、学生たちの探求心と社会貢献の心を刺激したいと思っています」

◉プログラム（3月13日@駒場Iキャンパス18号館ホール）

開会挨拶、機構紹介、基調講演	**真船文隆**（総合文化研究科）①、**網野徹哉**（教養教育高度化機構長）②、**石井菜穂子**（理事）③
第1部 講演「SDGsの現在地」	「国連から見たSDGsの今」**井筒節**（国際連携部門）④、「開発途上国の現場におけるSDGsの現状」**成田詠子**さん（国連人口基金駐日事務所長）⑤、「開発経済学から見たSDGsの今」**澤田康幸**（経済学研究科）⑥、「気候変動による健康影響とSDGs」**橋爪真弘**（医学系研究科）⑦、「誰一人取り残さない社会」**福島智**（先端科学技術研究センター）⑧
学生団体紹介など	Climate Youth Japan、UNiTeほか
第2部 パネル「パートナーシップを通してSDGsのその先へ」	**榎原雅治**（史料編纂所）⑨、**キハラハント愛**（総合文化研究科）⑩、**白波瀬佐和子**（人文社会系研究科）⑪、**額賀美紗子**（教育学研究科）⑫、**瀬川浩司**（環境エネルギー科学特別部門長）⑬、**原和之**（国際連携部門長）⑭　モデレーター：岡田晃枝
閉会挨拶、総合司会	**廣野善幸**（科学技術インタープリター養成部門長）⑮、**松本真由美**（環境エネルギー科学特別部門⑯

SDGsの17色を用いたSDGs教育推進プラットフォームのロゴ

KOMEX各部門と学生団体による展示も行われました

※③石井理事はリモートでの参加、⑥澤田教授はビデオ動画での参加でした

教養教育高度化機構（内線：44247）

シリーズ 第45回
連携研究機構
Life Cycle Assessment
未来戦略LCA連携研究機構 の巻

話／機構長・杉山正和先生（右）、平尾雅彦先生

未来のために今「先制的」LCAを

杉山　先端技術を開発しても、製品のライフサイクル全般で考えると割に合わない場合があります。技術を社会に実装するには、総合的に考えないといけません。LCAの研究者は以前からそうしていますが、近年は先端技術の研究者にもその動きが波及しています。

平尾　たとえば自動車を作る際に排出されるCO_2量は、部品ごと工程ごとのデータを積算すれば分かりますが、新しい作り方や素材を採用したときにどうなるかは分からず、推定するほかありません。そこを定量的に行うのが、機構の目指す「先制的」LCAです。

杉山　研究者は自分の技術こそ重要と考えがちですが、その技術を用いた製品を作るのが総合的に最善かは分かりません。先制的LCAでは、作ってからデータを調べるのではなく、研究者の声を聞きながら検討して注力すべき技術を決めます。精度にはこだわらず、出口に近そうな方向をデータから突き止めるわけです。

平尾　もう出口は見えていて、人類は2050年にネットゼロを達成しないといけない。ある意味IPCC※による先制的LCAの成果です。正しい方に動き出すために先手を取る「先制」で、英語ならpre-emptiveです。

杉山　私は2020年頃にLCAの重要性に気づき、LCAを集中的に議論する場が学内に必要だと思いました。そこで日本のLCAを牽引してきた平尾先生にお声がけし、1年かけて機構発足の準備を進めてきたんです。

平尾　日本の大学でLCAを冠した組織は初のはず。環境、工学、農学、経済、公共政策と多様性に富むのが機構の特徴です。LCAの研究者とLCAに目覚めた多分野の研究者が約半々の割合で参加しています。

杉山　今は企業でもLCAを軸にした戦略が必須で、共同研究の意欲も盛んです。機構には社会連携研究部門を設け、素材・自動車などの14社が参画しています。

平尾　特に石油や石炭が不可欠な分野では新技術開発の意欲が高い。たとえば自動車だとエネルギー、化学、鉄、アルミ、ガラスなど多分野が関係します。オープンイノベーションで皆が協力しないと先制的LCAは難しい。そこをコントロールするのが大学の役割です。新しいアイデアに加え、散在する知識の構造化も非常に重要です。2050年に向けてこの技術が肝となるというメッセージを、5年以内に打ち出すつもりです。

杉山　機構長としては、若者をこの分野に参入させ、研究計画を立てる際にLCAを自分で行える環境も整えたい。LCAベースの議論があらゆる場で行われる状況の実現が究極の目標ですね。

UTLCA
先制的LCAが実現する循環型社会を表すロゴ

https://www.utlca.u-tokyo.ac.jp

※気候変動に関する政府間パネル

#WeChange Now
第1回　男女共同参画室通信

東大が、変わる

男女共同参画室として、隔月でコラムを書かせていただくことになりました。このコラムでは、2022年度よりスタートした「UTokyo男女⁺協働改革#WeChange」の最新情報などを発信していきたいと思います。

＃WeChangeは、本学が、教職員や学生を含む大学構成員全員の意識改革に取り組むとともに、2027年度までに新たに着任する見込みの教授・准教授1200名のうち、約300名を女性とすることを目指す取り組みです。昨秋の発表時には、新聞報道で「300名」という数字が大きく扱われ、「男性は採用されなくなるのか」と感じた方もいたかもしれませんが、残り900名は男性が着任する見込みです。また、数ばかりが注目されがちですが、男女共同参画室では、意識改革などの基盤づくりとして教職員向け研修や、女性若手研究者の支援にも力を入れています。

このプロジェクトを通じて「東大が、変わる」ということを学内外に広めていくため、ロゴマークを策定しました。『学内広報』の表紙になったこともあり、既にロゴを見ていただいた方も多いのではないでしょうか。UTokyo Portalなどではロゴを展開したZoom背景等のダウンロードや名刺用ステッカー配布についてのお知らせを掲載しています。

4月にはウェブサイトがオープンしました。藤井輝夫総長や林香里理事・副学長のメッセージ、＃WeChangeで具体的に何を実施するのか、3月に発行したニュースレター等がご覧いただけます。男女共同参画室のメンバーの思いのこもった動画もありますので、ぜひ覗いてみてください。

（特任助教・中野円佳）

https://wechange.adm.u-tokyo.ac.jp/ja/

ワタシのオシゴト 第204回

RELAY COLUMN

法学政治学研究科等
公共政策学務チーム 橋本有葵

がんばれ GraSPPers!

なぜかちっとも片付かないデスクで

公共政策大学院（略称はGraSPP）で学務を担当しています。入試・入学から学位論文受付や修了まで、学生の皆さんに関わるあれこれの手続きを行っています。

GraSPPは学内では比較的小規模な大学院で学生数300名ほどですが、特徴的なのは約半数が留学生だということ。海外協定校とのダブルディグリープログラムや交換留学による学生の派遣受入も活発で、世界各地から多様な背景を持った学生が集まるとてもにぎやかな大学院です。異動してきたばかりの頃は留学プログラムの多彩さに圧倒され協定校の単位認定リストが夢に出てくるほどでしたが、周りの方に恵まれたおかげでなんとか着任3年目の春を迎えました。

個性豊かな学生たちから寄せられるお問い合わせはその内容も実に様々です。時には突飛な質問に頭を抱えながらも、世界中で活躍するGraSPPersのお助け役になれるよう日々のオシゴトに取り組んでいます。

数年ぶりのスキー合宿で白馬

得意ワザ：引越しの荷造りが素早くできます
自分の性格：のんき
次回執筆者のご指名：豊木麻紀子さん
次回執筆者との関係：同期で研修先が被りがち
次回執筆者の紹介：いつもパワーをもらえます

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

Field Study

第24回

本部社会連携推進課
体験活動推進チーム 遠藤菜央

FSが描く新しい地域創生ストーリー

フィールドスタディ型政策協働プログラム（FS）は学生が学内・現地を“奔走”して地域の課題解決の糸口を探る1年間の教育プログラムです。

予測不能な今の社会に生きる学生の皆さんは社会課題への関心が高く、将来は自らの専門を活かし社会に貢献することを目指す傾向にあります。では、そんな学生たちにとって、さらなる自分の可能性を広げる場は学内だけで十分なのでしょうか？

FSには「自らの学びを、今すぐ試してみたい」という強い志を持った学生がたくさん集います。ここでは、地域の現場に赴き、解決策を探ってもらいます。授業や実習と違い、想定通りに事が運ぶとは限りません。そんなリアルな現場でこそ、実用的な専門知やコミュニケーションが磨かれるのです。

このプログラムは、協力自治体から学生の皆さんへ、地域の課題を提示していただくことから始まります。そして自治体の方やチームのメンバーと綿密な準備を行い、地域の現場に入ります。住民の方の生の声を聴き、地域の実情について身をもって体験し理解を深めます。そして課題解決に向け、自ら考え、チームのメンバーと試行錯誤します。大学に戻りましたら学内の資料・教職員など大学の専門知を積極的に活用し、解決の糸口を探ります。

FSのフィナーレ！活動報告会の様子（2022年度）

これらの現地・学内での“奔走”を経て、最後にプログラムの締めくくりとして活動報告会を実施します。現地・学内で開催するこの活動報告会にて、課題解決への道筋を地域の方々に向けて提案します。1年間、一人一人の声に本気で向き合ったFS生にとって、担当した地域は第二の故郷のような場所。未来を少しでも良くしたいという想いで提案する姿は、地方創生を担うリーダーそのものです。活動を終えたFS生の中には、FSでの経験がきっかけでプログラム参加前に描いていたキャリアと全く別の道を選ぶ方も。

次世代を担う若きリーダーと、信頼を寄せてくださる自治体の皆様が織りなすストーリー。2023年もますます熱を帯び目が離せません！

FS開始時からの協力自治体：石川県能登町

インタープリターズ・バイブル 第189回

総合文化研究科 特任准教授
科学技術コミュニケーション部門
定松 淳

科学コミュニケーションの一番底に

コロナ禍が漸く落ち着いてきて、久しぶりに活気のあるキャンパスが戻ってきた。人の多い教室はまだ少し落ち着かない気がしてしまう一方で、17時過ぎの駒場キャンパスを歩いていると、教員のパワポを映すために前方が仄暗くなった教室に3人とか5人だけの学生が参加して、しかし熱心に教員の方を見ながら進んでいる授業も見かけるようになった。私にもそんな授業の記憶がある。教養学部2年の時に履修したドイツ語のK先生の授業だ。カフカの小説「判決」を原文で読むという授業で、やはり夕刻、履修者は3人だった。

「判決」は短い小説で、岩波文庫に翻訳が入っている。先に一読したが、ちょっと意味不明な結末で、全く理解できなかった。ドイツ語の初級しかとっていなかった私は、岩波文庫を原文に付き合わせながら、毎週この短編を読み進めていった。しかしそうして丁寧に読み進めていったうえで最終回にディスカッションしてみると、意味不明に思えた結末は理解可能なものに変わったのだった。

私はドイツ文学を志していたわけでもなく、ドイツ語を何かに役立てようという計画も持っていなかった。ただ一文一文を理解してゆくプロセスが面白く、履修を続けたに過ぎない。そこには「何かがわかっていくこと自体が心地よい」という感覚が存在していたと思う。冒頭の教室の学生たちも、必ずしもその授業に出たら何か得することがあるから参加しているわけではないだろう（マイナーな、遅い時間の授業だから）。でもそこにはやはり、「これをわかりたい」「わかること自体が楽しい」という感覚があるのではないか。

私は科学（広い意味での学術）コミュニケーションの一番底には、こういう価値観が置かれるべきだと思っている。科学の面白さ・楽しさを伝えたいという科学コミュニケーションは多いが、そこには研究費の獲得や、国策としての科学技術振興といった目的が潜んでいることもある。あるいは科学リテラシーの向上が、健康や収入の増加につながるといった主張がされることもある。しかし「何かをわかるようになる」という体験は、それまでの自分ではない自分に生まれ変わる体験である。それは各自の可能性の発現であり、そのこと自体が目的とされるに値する。もちろん押し付けであってはならないが、功利を越えた価値が科学コミュニケーションの一番底に置かれていてほしい。

科学技術インタープリター養成プログラム
http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

ききんの「き」

寄付でつくる東大の未来

第43回

社会連携本部渉外部門
アソシエイト・ディレクター
白石郁江

ノーベル賞の原石を育む奨学金

みなさんは現在の暮らし向きが苦しいと感じている東大学部生がどれくらいいるかご存じでしょうか？世帯年収が1000万円以上の学部生が40%超だとニュースで報じられている一方、世帯年収が450万円未満の学部生は14%います。そのうち暮らし向きが苦しいと答えた学部生は30%を超えています。東大大学院生の暮らし向きは公表されていませんが、苦しい思いをしている大学院生も同様に一定数いると考えられます。日本の博士課程進学者が減少している一因は大学院生時代の経済的困窮といわれていますから、ノーベル賞に繋がるような博士課程進学者を育むためには、その原石である大学院生を経済的に支援する必要があるでしょう。

卒業生等からの寄付で成り立つ東大独自の奨学金「ステューデントサポーターズクラブ奨学金（SSC奨学金）」が2022年にスタートしました。この奨学金で大学院生は2年間経済的支援を受けることができます。 大学院生向けの奨学金は返済しなければならない貸与型のものが多い中、返却義務のない給付型のSSC奨学金は大きな意義があります。

SSC奨学金は“顔が見える”ことも大きな特徴です。年に一度の中間成果報告会（写真）では、奨学生が研究成果を発表し寄付者と交流します。 奨学生からは「応援の言葉をいただき研究の励みになった」、 寄付者からは「希望に溢れる若者の話を直に聞けてよかった」という声がありました。また、年度末に発行される奨学生の報告書には「アルバイトの時間を減らして研究に専念できている」「経済的に安定したので博士課程に進学することを決めた」等の記載が多数あり、SSC奨学金がノーベル賞の原石である大学院生の研究や彼らの未来に大きく貢献していることを感じています。

2年目の今年は、有難いことにたくさんのサポートをいただき、昨年よりも奨学生募集数が増えています。全ての大学院生がお金の心配をすることなく研究に専念できる未来に繋がればと考えています。

※2023年度SSC奨学生は6月より募集開始予定

東京大学基金事務局（本部渉外課）
kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

トピックス

全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles）に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
4月12日	本部総務課	令和５年度 東京大学学部入学式を挙行
4月12日	本部総務課	令和５年度 東京大学大学院入学式を挙行
4月12日	工学系研究科・工学部	幾原雄一教授、柴田直哉教授の日本学士院賞受賞が決定
4月13日	未来ビジョン研究センター	SDGsシンポジウム2023を開催　「都市と自然：その連関の探求と持続可能性へ向けた課題解決のデザイン」
4月18日～5月9日	広報室	どうして昆虫食が注目されているの？→霜田政美、どうして電化が温暖化防止に必須なの？→瀬川浩司、どうしてCO_2に価格を付けるの？→大橋 弘、どうして気候に正義や不正義があるの？→佐藤 仁／GX入門・身近な疑問vs東大（『淡青』46号）
4月20日	男女共同参画室	“WeChange”ウェブサイトオープンのお知らせ
4月20日	広報室	観測データから見るトルコ・シリア地震　「数百年に一度」にどう備えるか
4月21日	本部協創課	127量子ビットのプロセッサーを搭載した量子コンピューターの導入に合意　～東京大学と日本IBM～
4月21日	本部渉外課	株式会社バッファロー様からパソコン用充電器をご寄贈いただきました
4月21日	広報室	コンテンツ市場に「もっと、面白く」を届ける双子の起業家　／Entrepreneurs 20
4月24日	総合文化研究科・教養学部	総合文化研究科の藤井貞和名誉教授が日本芸術院賞を受賞
4月24日	広報室	メディアにおける女性の未来　ジェンダーの視点から再考するポピュラー・メディア
4月28日	本部広報課	令和５年春の紫綬褒章受章
5月2日	本部学生支援課	第75回東京大学・一橋大学対校競漕大会が開催！
5月2日	広報室	巨大地震と向き合い、より安全なまちと建物を再建する　トルコ・シリア地震の建物被害と現地調査から
5月8日	本部広報課	東京大学の教職員のみなさまへ ～東大の活動制限指針をレベルSに引き下げ～
5月8日	本部広報課	東京大学の学生のみなさまへ ～東大の活動制限指針をレベルSに引き下げ～
5月10日	本部学生支援課	自転車部競技班４年篠崎選手がチャレンジロードレースにて優勝！
5月11日	広報室	トルコ・シリア地震後の中東情勢

CLOSE UP　127量子ビットの量子コンピューターの導入に合意　（本部協創課）

相原博昭 理事・副学長（左）とIBMフェローのJay Gambetta様

東京大学とIBMは、127量子ビットのプロセッサー「IBM Quantum Eagle」を搭載したゲート型商用量子コンピューターを本年中に新川崎・創造のもり かわさき新産業創造センター（KBIC）にて稼働開始予定であることを発表しました。クラウド経由で利用可能な日本初の量子コンピューター「IBM Quantum System One」の専有使用権を有する東京大学は、量子イノベーションイニシアティブ協議会（QII）に参画する様々な企業、公的団体や大学等研究機関とともに量子コンピューターの利活用に関する研究を進めており、数多くの学術論文を発表するなどの成果をあげています。127量子ビットのプロセッサーを搭載したIBM Quantum System Oneについても、QIIに参画する様々な企業、公的団体や大学等研究機関とともに専有利用する予定です。127量子ビットのプロセッサーを搭載した量子コンピューターの北米以外での稼働開始は日本が初となります。

春の紫綬褒章受章

三浦篤 元教授（総合文化研究科・教養学部）①、苅谷剛彦 名誉教授（教育学研究科・教育学部）②、高津聖志 名誉教授（医科学研究所）③、岡部徹 教授（生産技術研究所）④が、令和５年春の紫綬褒章を受章しました。おめでとうございます。それぞれゆかりの深い先生が執筆した紹介記事については、全学ウェブサイトの「各賞受賞一覧」のページからご覧ください。

①

②

③

④

CLOSE UP　株式会社バッファロー様から充電器の寄贈がありました　（本部渉外課）

株式会社バッファロー様から、新入学部生を対象に、USB Power Delivery対応のパソコン用充電器3200台をご寄贈いただき、4月17日に贈呈式が行われました。本寄附は、優れた多様な人材の輩出と地球規模の課題解決に取り組む本学において必須である、DXの推進へ向けた環境整備に大きく資するものです。贈呈式では、株式会社バッファローの渡邊泰治 副社長から寄附目録が、本学の津田敦 理事・副学長からご寄贈への感謝状が贈呈されました。その後、懇談会が開催され、今後の展開について意見が交わされました。

CLOSE UP　SDGs シンポジウム2023 を開催　（未来ビジョン研究センター）

［上段］藤井総長（開会の辞）、オーストラリア国立大・バイ教授、シュプリンガーネイチャー・キャンベル卿（基調講演）、シュプリンガーネイチャージャパン・ブーケ代表取締役社長（閉会の辞）［下段］パネルディスカッションを行う本学・亀山康子教授（モデレータ）、バイ教授、キャンベル卿、ストックホルム大・エルムクビスト教授、本学・曽我昌史准教授、兵庫県立大・新保講師、シュプリンガーネイチャー・コンテスタービレ博士

2月28日、東京大学とシュプリンガーネイチャーは「都市、自然、持続可能な開発目標（SDGs）」に関するシンポジウムを共催しました。今回はSDGsの目標11「住み続けられるまちづくりを」に加え、SDGsの他の目標との接点にも焦点を当てました。

藤井輝夫総長は開会挨拶で、都市活動は生物多様性の損失や気候変動に直結し、単一のステークホルダーの集団や学問分野のみでは解決が困難な、多次元的な持続可能性の課題を生み出していると指摘し、統合知的アプローチを採用し、そのための場を作ることの必要性を強調しました。各基調講演やパネルプレゼンテーションでは、SDGsの目標11の幅広さを踏まえ、都市と自然の関係がもたらす公平性への影響や、都市と自然の接点で起こる現象を理解し、都市の持続可能性を高める解決策を設計するための超学際的研究の必要性についても言及されました。パネルディスカッションでは、都市とSDGsの接点で研究、出版、実践に携わってきた登壇者の経験に基づく議論が行われました。

本シンポジウムには東京大学伊藤国際学術研究センターで63名、オンラインで390名の合計453名が参加しました。学術・研究機関だけでなく、民間企業、政府機関、市民社会からの参加、学生や若手研究者の参加も多く見られ、学際的なイベントとなりました。

CLOSE UP　自転車部競技班の活躍とボート東商戦の開催　（本部学生支援課）

優勝の瞬間の篠﨑選手：Photo by JCF

ボート東商戦の対校女子ダブルスカル

4月8日～9日に行われた日本自転車競技連盟主催第46回チャレンジサイクルロードレースにおいて、U23部門に出場した自転車部競技班の篠﨑選手が見事優勝を果たしました。全日本選手権とほぼ同等の強豪選手が一堂に会する非常にハイレベルな大会です。静岡県修善寺の伊豆サイクルスポーツセンター5kmサーキットを13周する計64kmのコースで開催された男子U23カテゴリーには、計163名の選手が出走。全国大会でも優勝経験のある強豪選手たちがペースアップを図る中、自身も積極的な動きを見せながら、しぶとくメイン集団に残った篠﨑選手は、残り2周回で日本大学の菅野選手と飛び出しました。最終周回まで二人は逃げ続けましたが、篠﨑選手は最後の直線上り坂で菅野選手を振り切り、見事に優勝を勝ち取りました。

一方、4月30日には戸田ボートコースで第75回東京大学・一橋大学対校競漕大会（ボート東商戦）が開催されました。4年ぶりにコロナ禍前の大会規模に戻った今大会では、対校女子ダブルスカル、対校男子舵手付きフォアの二種目で優勝を果たしました。対校男子エイトでは惜しくも敗れたものの、今年は会場に運動会公式マスコットのイチ公も登場し、観客席は大いに盛り上がりました。

今後とも本学運動部へのご支援・ご声援をよろしくお願いいたします。

祝・百周年 五月祭が久々に本来の形で開催されました!

5月13日～14日に第96回五月祭が行われました。前回は来場者数を制限し飲食を伴う出店を禁止した上でのハイブリッド開催でしたが、今回は4年ぶりに飲食物提供あり＆事前予約不要という本来の形での開催でした。テーマは「はなみどり」。さまざまな意味をもつ緑に、華やかな祭への思いを重ねました。研究成果の展示、音楽演奏、趣向を凝らした各種パフォーマンス等、そして昔から学園祭を賑やかに彩ってきた飲食を提供する模擬店の出店など、数多くの企画が行われ、天候には恵まれなかったものの、2日間で約10万人の来場者がありました。

七徳堂鬼瓦

仏教とコロナ

コロナが流行し始めてから以降、仏教はコロナ感染に対して何ができるのですか、と幾度となく問われることがあった。少しばかり戸惑う質問ではあるが、社会的な危機に見舞われた時に、人が発する素朴な疑問なのであろう。おそらく歴史上、流行病が発生したときには同じような問いがなされたことは想像に難くない。それは、人々が抱える悩みや苦しみにどのように寄り添ってきたのか、と問われていることでもあるのだ。

古代社会においては加持祈祷が行なわれ、病気調伏を祈願したが、現代においても同じようなことが行われた。しかし、その加持祈祷は、コロナウイルスをただ撲滅することを目指したものではなかった。あるお寺ではウイルスの一日も早い成仏を願って収束を祈願していた。普通の目からみればコロナウイルスは厄介者以外の何物でもない。しかし厄介者扱いは我々の立場から見た一方的な見方であり、善悪を超えた次元での見方をすれば、コロナウイルスであっても、全面的に悪の存在というわけではない……もちろんやっかいな存在であることは間違いないのだが、それでも決めつけは凡夫のなせる業ということなのである。

さて、筆者は今、仏教の伝えた修行に関心をもって研究を進めている。その修行とは私たちの身体と心を見つめることなのだが、今風に言えば、自身の行動をメタ認知することなのである。それは、私たちの悩みや苦しみを超えるためのものであった。釈尊が見いだした世界は、私たちの悩み苦しみは、私たちの心が自動的に起こした反応であるとするものであった。私たちの感覚器官が世界を捉えると、すぐさま自動の反応が起きる。その反応が、時には悩みや苦しみになることがある。この自動反応を静める機能をもった身心の観察が仏教の伝える瞑想であり、昨今では、マインドフルネスという名前で市民権を得るようになった。

私たち人間は、この自動思考を持つことによって、おそらくは原始時代は難を逃れていたのであろうが、一方で、その反応が私たちを苦しめることも惹き起こしている。このことに気づき、どうすればこの自動思考の反応が抑制されるのか見いだした釈尊は、やはりこのうえなく優れた方であったというほかはない。今、筆者は「ムーンショット」※9の課題推進者の一人として、安らぎと活力のある世界を目標に、文理融合の研究を進めつつある。心が起こす悩み苦しみが、たとえ起きたとしても、煩わされることのないよう心を整えていく、そのお手伝いをすることが真に悩み苦しみに寄り添うことなのだと思う。

蓑輪顕量
（人文社会系研究科）

※内閣府の大型研究プログラム。目標9は「2050年までに、こころの安らぎや活力を増大することで、精神的に豊かで躍動的な社会を実現」。

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課 TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp
www.u-tokyo.ac.jp